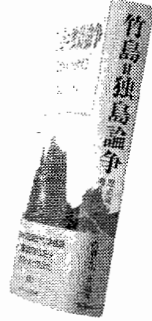


## 自由のため

その⑩ 齋藤 貴男

### 日韓歴史家が編む 真実は

内藤正中・朴炳渉  
『竹島―独島論争  
歴史資料から考える』  
(新幹社/税込2,625円)



日本海は隠岐諸島の北西一五七キロの海上に浮かぶ竹島は、二つの小島と数十の岩礁から成る。対岸の韓国では独島と呼ばれ、かねて日韓両国の間で領有権が争われてきた。大衆レベルでの対立が激化した契機は、島根県が二〇〇五年に制定した「竹島の日」だった。

邦の版図外にしたというのである。江戸時代における日朝間の交渉結果を尊重した決定だった。

そもそも明治以前は、現在の鬱陵島（韓国領）が「竹島」と呼ばれていた。現在の竹島は「松島」「竹島」との一对でとらえられていたためである。それだけ日本側の関心は薄かった。ところが日露戦争に伴い、明治政府が竹島の領土編入を一方的に閣議決定。植民地支配を経て、戦後、韓国を解放した米国が、東西冷戦の渦中で日本に一定の花を持たせるために、あえて竹島の領有権を曖昧にさせたのが、今日の対立を導いた。

（騒がれるわりには日本でも竹島―独島問題の歴史的背景がどれだけ知られているのか疑問です）

編著者たちの指摘は至言である。巻末の公文書、地図などの史料も貴重だ。

もつとも韓国の総合雑誌『月刊中央』最近号は、韓国が国交正常化の過程で、竹島については互いの主張を認め合う旨の密約を交わしていたと報じている。大衆は両国政府の奥の院の手のひらで踊らされているのかもしれない。歴史の真実を理解し、今度こそ米国の思惑などとは関係なく、友好的な解決が目指されんことを。



ピーター・フォーブズ  
吉田三知世/訳  
『ヤモリの指 生きもののスゴい能力から生まれたテクノロジー』  
(早川書房/税込2,310円)

### 生物の「離れ業」の数々

ヤモリを捕まえようとした人なら悔しい思いをしたことがあるはずだ。天井に逃げられたらもうお手上げ。どうして奴ら、落ちてこないんだろう。

その謎は、電子顕微鏡が登場するまで解けなかった。本書の図版を見て仰天したが、ヤモリの指に微細にして精巧な「毛」が生えているのだ。その数、約十億本。その先にスパチュラ構造と呼ばれるヘラのようなものが付いていて、これが壁面に吸着するのだ。

人間の目には滑らかに見えても、ナノレベル（1ナノは、1分の10億分の1）ではギザギザで荒いものだが、スパチュラが凹凸に合うよう変形する。

トツケイという大型ヤモリは、体重120キログラムの間を支えられるという。ヤモリの指と同じ機能を持つヤモリテープあるいはヤモリグロープの研究開発が各地で進んでいる。

生物の原理を学んで、新

しい技術を創造する。バイオ・インスピレーションと呼ばれる分野だ。ここ15年ほどで、急速に発展してきた。ヤモリだけでなく、本書は蓮の葉や、蜘蛛の糸、バクテリオファージ、モルフオ蝶の羽、蠅の飛行など生物の「離れ業」を紹介。「自然と技術は対立するものだ」という図式は、新しい科学技術の前に崩れ去ってしまうのだ」とサイエンスライターは言う。

自然から離れて進んでいくつもりが、いつしかその背中を追っていた。これが技術の歴史かもしれない。

そこから新しい環境保護の視点も得られる。

「希少性のためだけに保護されなければならぬ」と言われていた生物が、まったく新しい技術の青写真であることが明らかになるというケースが多くなってきた。

だからこそ生物の多様性を守らなければならない。ビジネスチャンスを失いたくなくては。